



## 八 救世主出現

---

キー。ジープ型の軽自動車が発狂の会場の外に、急ブレーキをかけて止まった。

誰だろう。ゾンビに追われて、盆踊り会場に逃げてきたのか。だが、その音を聞きつけて、ゾンビたちがその車を取り囲んだ。

ああ、無理だ。車で乗り付けてきた人は、ゾンビに襲われ、ゾンビ化し、ゾンビダンスを永遠に踊り続けるのだろう。だけど、中垣たちには何もできない。ゾンビたちが人間を襲う惨劇を見て見ぬふりをするだけだ。圧倒的な数と力を持つゾンビに対して、中垣たち人間は無力の一言だ。

そう言えば、盆踊りを復活するにあたり、地域の人たちに盆踊りに参加しませんか、と声を掛けたところ、多くの人たちから見て見ぬふりをされ、怒りとあきらめを感じたけれど、今は、反対に、地域の人々がゾンビに襲われるのを見て見ぬふりをしている。なんと皮肉なことだ。

中垣は事の顛末の見るために、軽自動車の方に顔を向けた。すると、軽自動車を取り囲んでいたゾンビたちが次々と二つに分かれていく。いや、逃げていく。その切り開かれた空間をレッドカーペットを歩く映画俳優のような余裕の足取りで、誰かが本部テントにまっすぐに近づいてくる。

「郷土先生」

棒になっていた足にエネルギーが充填したかのように、中垣がテントから飛び出した。

「やあ、君が中垣君か」

郷土先生は、全身白装束で、頭にろうそくを二本縛り付け、首からは線香と百円ライターをぶら下げ、右手には数珠と和菓子を持ち、左手には青いバケツを持っていた。そのバケツの中には、ひしゃくと新聞紙でくるまれた菊やカーネーション、百合の花の組花が二組入っていた。

その異様な風体や雰囲気によって、ゾンビたちは郷土先生から逃げていったのだろう。ゾンビにも怖いものがあるのだ。もちろん、中垣だって、郷土先生だと知らなければ、そうした姿の人を見れば逃げ出したらだろう。

「先生。遠いところに来ていただき、ありがとうございます」

中垣はゾンビに対する以上の気力を持って、つまり、恐怖の心を抑えてということだが、郷土先生の手を恐る恐る握りしめた。

温かい。赤い血が通った温もりだ。やはり、郷土先生はゾンビじゃない。人間だ。中垣は少し安心するものの、普通の人がこのようなコスチュームをするのかと、返って恐怖心が増す。

「いや。ゾンビの謎を解明するのなら、どんなことも厭いません。私がこれまで調べた結果と中垣君からの連絡の内容から、ここに車で来るまでずっと頭の中で何回も反芻しながらくると考えていました。そう。それで謎が解けたのです。ゾンビの発祥の地はここです。この地です。絶対に間違いありません。誰が反対しようが、私は考えを絶対に変えません」

郷土先生はやぐらの周りを踊るゾンビとゾンビ化した人間を見つめた。

「あなたが郷土先生ですか。中垣さんから話を聞きました」

先ほどまで気を失いかけていた木本さんや自治会長さんたちも救世主を一年以上も待ちかねていたかのように、中垣のすぐ後ろに立った。だが、前には出ようとしない。中垣を盾にしているのは、誰の目にも明らかだった。

「それにしてもその姿は？」

自治会長が誰もが思っても口には出せない疑問を、失礼にならないように失礼にも尋ねた。

「ああ。このかっこうですか。これまで、全国のゾンビを調べるうちに、ゾンビはお墓参りをしている人は襲わないこと知ったのです。実際に、お墓参りをしなくても、このような姿をしていればゾンビは襲ってこないのです。まさに、ゾンビは人の見かけの九十九パーセントで判断しているんです」

郷土先生はノーベル平和賞を受賞した際、受賞の喜びをスピーチしているかのように自慢げに述べた。

百から九十九を引けば、残り一だ。その残り一は何だ、中垣は相手の誘いに乗るように、つい尋ねた。

「じゃあ、ゾンビたちは残り一パーセントを何で判断しているんですか」

郷土先生がその問を待っていましたばかりに、笑みを浮かべた。

「愛ですよ。愛」

「愛？」

相手の意外な答えに、中垣たちは細ネギに始まり、ゴボウ、ニンジンを経て、果ては大根に至るまでの太さの野菜を口に咥えたかのように、それぞれの驚きの大ききごとに、口をあんぐりと開けた。

「そうです。愛です。郷土への、地域への、祖先への、家族への愛です。その愛があるかどうかをゾンビたちは判断し、襲うか襲わないかを決めているのです。そう、決め手は、九十九パーセントの姿ではなく一パーセントの気持ちなのです」

ノーベル平和賞の受賞スピーチは永遠に続くかと思われた。

「まあ。大変お疲れでしょう。詳しいお話は、大切に手で摘んだ愛のあるお茶でも飲んで話ませんか」

長老の自治会長が長年取った杵柄で、相手の気持ちを汲み取り、その場の雰囲気壊さないように誘う。

「地元のおばちゃんたちによる、前日から寝ないで作った愛のあるおはぎもありますよ」

これでダメ押しだ。

「そうですか。愛のある言葉だけでなく、愛のあるもてなしをしていただきありがとうございます。中垣君からのメールを受けて、隣の県から車をすっ飛ばしてきたので、確かに疲れしました。それに、少し、お腹も空いてきたところです。お腹にも少し愛を与えてあげましょうか」

と、本部テントに一同が揃って向かおうとした。突然、盆踊りの曲が終わり、ゾンビたちの動きも止まった。そして、本物のゾンビとゾンビ化した人間たちがこちらを振り向く。そして、号令もかけていないのに、全員が足を一步、前に踏み出した。

「いけない」

中垣は本部テントに素早く走ると、音響機のスイッチを押した。引き続き、ダンシングヒーローの曲が鳴り出した。

「今夜だけでも、シンデレラボーイ・・・」

その曲を聞くと、体を本部テントに向けていた本物のゾンビとゾンビ化した人間たちは、再び、輪の方向に向き、熱狂的に踊りだした。その様子をじっと見ていた郷土先生は

「いや。この様子だとお茶を飲んでいる暇はありませんな。今は、ゾンビ化して踊っている人たちも、これ以上、長引けば、本当のゾンビ、つまり死体になってしまいますよ。早く、適切な対処が必要です」

「はあ、そうですか」

現状把握ができない中垣たちは郷土先生の勢いに頷くしかない。

「ここの地区の地名は確か」

「石伏です。石伏町です。神社の名前も石伏神社です。その神社の裏に大きな石があって、それを御神体として崇めているのです」

「それです。必ず、地名には理由があるのです。その理由を解き明かすことで、このゾンビ問題も解決するでしょう。そこに私を連れて行ってください」

郷土先生はそう言いながら、案内もないまま神社の本殿の方ずんずんと突き進んでいく。郷土先生はポケットから小銭を取り出し賽銭箱に入れた後、鈴をじゃらじゃらとならし、二礼二拍手一礼をした後、本殿の後ろに回る。中垣たちも同じく、賽銭と鈴、二礼二拍手一礼をして、慌てて郷土先生の後姿を追う。本殿の裏には、巨大な石が鎮座していた。その両脇には、大人が両手を回しても届かないくらいの太さの幹となったケヤキが石を守るかのように屹立していた。

「これか」

郷土先生は神社の本殿でお祈りしたように大石に対しも頭を下げた。その後、大石の周りを何度も右回り、左回りと周る。その姿をじっとしたまま目だけで追う中垣たち。

「ここだ」

郷土先生が突然、神社中に響き渡るような大きな声を上げた。

「ここだ」「ここだ」「ここだ」「ここだ」

その声は、大石、巨木、鎮守の森の木々に跳ね返ってこだまする。中垣たちは「ここだ」を求めて郷土先生の方へ走り寄る。郷土先生が指をさしている。

「ここが少し動いているように見えます」

郷土先生が指摘するように、大石と地面の間に少し隙間が空いていた。確かに石がずれてこすった後に新しい地面が見えていた。その奥にかすかだが穴が開いている。

「この穴について何か知っていますか」

郷土先生が詰問するように振り向いた。中垣たちがお互いに顔を見合わず。誰も答えられない。

「自治会長さんはどうですか」

郷土先生が名指しをする。

「いやあ。私も知らないですね。私よりもっと長老の方に聞かないとわからないですね」

自治会長が頭を搔いている。

「その穴は、昔、この地域を支配していた龍が住んでおってな。龍が暴れないように、村人たちは、毎年、わしのようなきれいなおなごを差し出していたんじゃ」

突然の声。そこに集まっていた郷土先生を始め、中垣たちは声がる方向に振り向いた。そこには、さっきまで呆けたような顔で本部テントの椅子に座っていたはずの、ダンシングヒーローの踊りの提唱者である大西さんがちょこんとだが、存在感丸出しで立っていた。

「そんな伝説がやはりあったんですね」

郷土先生が我が意を得たばかりに大きく頷く。

「そんな話は初めて聞きましたよ」

「龍ですか」

「その穴に今も龍が住んでいるんですかねえ」

「まさか」

「本当ですか」

中垣を始め、そこにいた人たちが口々に大西さんに対して問い掛ける。最後の発言の、本当ですか、は、龍が存在していたと言うよりも、わしのようなきれいなおなご、いう発言に対して疑問を發したものだ。

「ああ。本当じゃ。昔は、この地区にも龍がいて、わしのようにきれいなおなごがいたんじゃ」

大西さんは、言い伝えを繰り返す。特に、後半の、わしのようなきれいなおなご、の部分強調した。だが、今の大西さんの全てが凝縮された顔や体にその面影は残っていないことは、ここにいる全員があうんの呼吸で認知していた。

「多分、その方がおっしゃることは間違っていないでしょう。いえ、わしのようなきれいなおなご、という部分じゃないですよ。あくまでも、龍の伝説の部分ですよ。全国各地にも、そうした龍と龍への人身御供の言い伝えは数多く残っています」

郷土先生がみんなの疑問に容赦なく終止符を打った。この言葉を聞いて、さすがに大西さんも、再度、わしのようなきれいなおなご、という発言はしなくなった。

「じゃあ、ゾンビはその穴から出てきたのですか」

「龍がゾンビに化けたんですかねえ」

「いや、人身御供となった女性たちの霊がゾンビとなって現れたんじゃないですか」

「男性のゾンビもいますよ」

「龍と人身御供になった女性との子どもじゃないんですかねえ」

「いや、女性と一緒に人身御供になった人たちじゃないかなあ」

中垣たちは、口々に思い思いの空想の産物を披露しあう。

「今は、龍と人身御供の伝説の真偽やゾンビの正体を確かめる時じゃありません。それよりも、ゾンビたちに元にいた地面に戻ってもらうことが先決です。まずは、この穴をふさぎましょう」

郷土先生が大石を押し始めた。

「穴を塞いだら、ゾンビたちが帰るところがなくなるんじゃないですか」

中垣が郷土先生の背中に声を掛ける。

「ゾンビたちは地面から出てきたと聞いています。多分、ゾンビを支配している何者かがいるはずです。その者がこの穴から出てきたのです、この穴を塞ごうとしたら、きっと慌てて戻って来るに違いありません」

郷土先生は振り向きもせず、確信を持って石を押し続けている。御存じのように、石は人間の頭の大きさであっても、数十キロの重さがあり、一人で持ち上げることは困難だ。

それなのに直径十メートルもある大石を一人で動かすなんて無茶だ。無知だ。だが、そんなことは先刻承知済みの顔で郷土先生は両手を大石に押し付け、両足で踏ん張っている。だが、その踏ん張った地面は踏ん張り切れないのか、表層の土が滑り始めた。それでも郷土先生は

「よいしょ。こらしよ」

と大声を上げて、大石を一人で押している。三本の皺が寄った額からは汗が噴き出している。だが、大石一ミリも動こうとしない。

「あた」

大石が動かない代わりに、大石に引っ付き、何年もかけて成長した苔がはがれた。そのため、苔を押していた手が滑り、郷土先生の顔面が大石にぶつかったのだ。それでも大石は微動だにしない。代わりに、郷土先生の前歯がぐらついた。

「先生。僕も手伝います」

中垣が見かねて飛び出した。



「ああ。ありがとう。やはり、これだけ大きな石だと一人では動かないな」

「そりゃあ、そうですよ。でも、二人でも難しいと思います」

「でも、やってみないとわからないだろ。文化人類学とは体験することで、初めてわかるものなんだ。机の上だけでわからないよ。それに、なぜ、こんな大きな石が神社の裏にあるのか不思議だろう」

「そうですね。昔は、今のようにクレーンのような重機があるわけではないので、どこから運んでは来られないでしょう。多分、元々、ここに大きな石があったから、お祭りをして、神社を建てたんじゃないですか」

「まあ、普通はそう思うだろう。でも、お城の石垣にも、これくらいの大きさの石が積まれているよ」

「そうですね。昔の人はすごいですね」

「ああ、確かにすごい。だけど、すごいと思うだけでは謎は解明しないんだ。やはり、どうやって動かしたか、運んだか実証してみないとね。君だって、地元の盆踊りがどんなものか知るために、ボランティアに参加したんだろう」

「そうですけど」と中垣は答えながらも、本当は、楽をして単位を取りたかったんですとは言えない。二人が会話をしながらも、大石を動かそうとしていると、最初をあきれてみていた人たちも、大石の周りに集まり、両手両足、腹筋背筋、大腿四頭筋・下腿三頭筋など、全身の筋力を投入して、大石を押し、地面の穴の隙間を塞ごうとした。